

人形ファンタジーにおける恐怖 Fear in Dolls' Fantasy

伊達 桃子
Momoko Date

要旨

人形に命を仮託する物語、いわゆる人形ファンタジーの中には、人形怪談と呼ばれる恐怖を喚起する物語群がある。それらを分類し、死者が取り憑く人形、未来を改変する人形、人間と入れ替わる人形の3つの類型を見出す。さらに、おのおのの類型において、恐怖を生み出す源泉を探り、主人公の内面的問題が恐怖と密接に結びついていることを明らかにする。ある種の物語では、内面的問題そのものが人形の姿を取って立ち現れ、恐怖を克服することが、問題の解決または認識につながっている。さらに、恐怖が子どもや思春期の主人公および読者にもたらす効用について考察し、自我の確立と力の制御、異なる視座の獲得、他者への共感と歴史理解という3つの効用があることを主張する。

キーワード：(人形) (恐怖) (ファンタジー) (児童文学)

はじめに

いつの時代も、怖い話は人々を引きつける。子ども向けの物語といえども例外ではなく、児童文学の前身である昔話や民話には、幽霊や魔物、殺人や子捨て、狂気などのおどろおどろしい要素があふれている。しかし、自身も優れた児童文学の書き手である Philippa Pearce は、子ども向けの幽霊物語のアンソロジー *Dread and Delight* (1995) の序文で、このジャンルの歴史は “surprisingly short” (Pearce ix) と述べ、Christopher Woodforde の *A Pad in the Straw* (1952) をその嚆矢としている。彼女はその理由として、“a continuing unwillingness of adults to admit that most children wanted — perhaps *needed* — the experience of safe fear” (Pearce xvi) を挙げている。子どもに向けて恐怖をかき立てる物語を書いたり語ったりすることは、子どもの想像力を抑制し道徳心を涵養しようとする教訓物語の書き手にせよ、子どもの無垢と想像力を賞賛するロマン主義の信奉者にせよ、良識ある大人には長い間、眉をひそめられてきたのである。

しかし、20世紀後半の社会状況の大きな変化が、子どもの本における恐怖をいわば解禁した。商業主義の隆盛、児童心理学の発達、メディアの進歩による情報化社会の到来など、理由はさまざまに考えられるが、1990年代頃から、子ども向けの恐怖小説が書店にあふれはじめた。多くは同工異曲のシリーズもので、イギリスでは Scholastic 社の *Goosebumps* ⁽¹⁾ や *Point Horror* ⁽²⁾ といった人気シリーズ、日本では童心社の『怪談レストラン』⁽³⁾ シリー

⁽¹⁾ 1992年に R. L. Stine 執筆で開始した子ども向け恐怖小説シリーズ。現在までに180巻以上が出版されている。

⁽²⁾ 1991年に開始した10代の少年少女向け恐怖小説シリーズ。R.L. Stine, Diane Hoh らが執筆している。

ズなどがあり、小学生からヤングアダルトまでの人気を集めている。

こうした恐怖小説において人気のあるモチーフのひとつが、人形にまつわる怪異である。夜中に動く人形、髪の毛の伸びる人形、呪いの薫人形など、こうした怪異は小説という「書かれた」物語のみならず、学校や地域で「語られた」物語の中でも、定番のモチーフとなっている。これらをまとめて人形怪談と呼ぶことにしよう。一方で、児童文学の中には人形ファンタジーというジャンルがある。人形やぬいぐるみに命と人格を与え、人間社会を見つめさせたり子どもとの交流を描いたりする人形ファンタジーは、*The Adventures of Pinocchio* (Carlo Collodi, 1883) や *Winnie-the-Pooh* (A. A. Milne, 1926) を思い出すまでもなく、ほのぼのと心温まる作品や風刺の効いた滑稽な作品が多い。このような「可愛い(滑稽な)人形」と、「恐ろしい人形」の差はどこにあるのだろうか。子どもにとって、命を仮託された人形とはどのような存在なのだろうか。この小論では、人形怪談を人形ファンタジーの一種としてとらえ、いくつかの類型から恐怖を生み出す原因を探るとともに、児童文学においてそのような物語が持つ意味を明らかにしようと試みる。

I 人形ファンタジーにおける恐怖の類型

1. 死者が取り憑く人形

人形ファンタジーにおける人形は「生きている」。すなわち、持ち主の人間の意思を離れて動いたり、話したり、全体または部分的に成長したりと、生物めいた振る舞いを見せる。どれもしない場合は、少なくとも思考と感情を持った主体として描かれる。こうした仮の「命」の源をどこに求めるかは、物語によって様々であり、制作者や持ち主の愛情にそれを求めるものが多い。しかし、恐怖を生み出すことを目的とした物語の場合、逆説的だがその源が「死」に求められることがある。すなわち、死者が取り憑いて人形を動かしているという説明がなされる物語であり、これは人形怪談のひとつの典型である。

この2つの説明は、見た目ほどかけ離れているわけではない。特に時代を経た人形の場合、制作者は既に死者であることが多いからだ。たとえば、Sylvia Waugh の *The Mennymys Series* (1994-1997) に登場する等身大の人形家族 Mennym 一家は、制作者の Kate Penshaw の死後、その霊によって命を得たとされている (“We are nothing but a family of rag dolls living for no other reason than that the spirit of Kate Penshaw could not rest easy in her grave.” (Waugh 12))。しかし、それをもってこのシリーズを人形怪談と呼ぶことはできないだろう。では、死者が「命」を与えている人形は、どのようにして恐怖を生み出すのだろうか。

まずは、単純に生者に恨みや害意を持っている場合がある。Kathryn Reiss の *Sweet Miss Honeywell's Revenge* (2004) では、冷酷な女家庭教師 Miss Honeywell に一泡吹かせようと悪戯をしかけた教え子 Penelope が、誤って彼女を死に至らしめてしまう。Miss Honeywell の霊は Penelope のドールハウスの人形に取り憑き、彼女の周囲に不幸や事故を招き続ける。Penelope の一生に渡ってつきまとっただけでなく、彼女が寿命を迎えると、新たな犠牲者を物色し、主人公 Zibby をドールハウスの持ち主に仕立て上げる。そして、Zibby の人形遊びが常に不吉な形で実現するように仕向け、家族や友人に危害を加えたあげく、母親の体を乗っ取ろうとするのである。

Miss Honeywell の害意は加害者の Penelope に向けられるだけでなく、無関係な Zibby やその家族をも巻き込んでいく。通り魔にも似た無差別な危害が、人形遊びという本来楽しいはずの行為を通じてもたらされることが、この物語の恐怖を生み出している。

(3) 1996年に松谷みよ子責任編集で開始した子ども向け恐怖小説シリーズ。出版社によれば50巻900万部を超える人気作品。

死者が取り憑いた人形が、生者に危害を加える意図を持たず、ただ何かを訴えかける場合もある。Betty Ren Wright の *The Dollhouse Murders* (1983) では、過去に起きた未解決の殺人事件が、その家を模したドールハウスを舞台に夜ごと再現される。夜中に動く人形を目撃した主人公 Amy は恐れおののくが、ドールハウスが何かを伝えようとしていると感じて事件を調べる。その結果、被害者が自分の祖父母であり、犯人と目されたまま事故死した青年が伯母 Clare の恋人だったこと、彼を祖父母に引き合わせた Clare がいまだに自分を責めていることを知る。勇気を出して再現劇を見守った Amy は、祖父母の霊が伝えたがっているのが、青年とは違う真犯人の名前であることに気づく。Clare が故なき自責の念から解き放たれた時、死者たちはドールハウスから去って行く。

この物語の恐怖は、人形と死の結びつきによってもたらされる。人形が命あるもののように動いて、殺人というおぞましい行為を繰り返し、また命のない人形に戻っていく有様は、生死の境を曖昧にする。また、人形が言葉を発せず、Amy との間にまったく意思疎通がないことも、彼女の恐怖を増幅させる。ゆえに、人形の意図が判明した時、恐怖は薄れ、悲しみと安堵だけが残る。人間は理解できないものにもっとも恐怖を感じるのである。

同じく人形が死者の訴えを伝えるのは、Holly Black の *Doll Bones* (2013) である。Zach, Poppy, Alice の3人は幼なじみで、いつも人形を使つたごっこ遊びをしていたが、1体だけ遊ぶことを禁じられた高価なボーンチャイナの人形を Queen と呼んで密かに恐れていた。ある日、12歳の Zach がいつまでも人形遊びをしていることを心配した父親が、勝手に彼の人形たちを捨ててしまう。数日後、Poppy が夢で Queen の声を聞く。Queen は Eleanor という少女の骨を焼いて作られた人形であり、体内の空洞には彼女の遺灰が取められていた。Queen は家族の墓に自分を埋めてくれるよう Poppy たちに頼み、そうしなければ取り憑いて災いを起こすと脅す。父に怒り狂っていた Zach は、Poppy や Alice とともに Eleanor の墓を探す探索行に出る。2日のうちに数々の冒険を重ね、彼らは Eleanor の墓を見つけただけでなく、彼女の死の真相にもたどり着く。

少女の死体から作られた人形というぞっとするようなアイデアは、死と人形の結びつきをより直接的に訴えかけてくる。この物語の人形は死者の代理ではなく、死者そのものなのである。加えて、この物語の恐怖の特徴は、超自然的な物事が起きているのかどうか、ほぼ最後まで判然としないことにある。Poppy は作り話の名手とされ、後の2人は彼女に引きずられて旅に出たものの、話の内容については半信半疑である。旅の途中、野宿の場所が荒らされて人形が移動していたり、Zach も Eleanor の夢を見たり、通りすがりの人が彼らを4人連れ扱いたり、異常なことが何度か起こり Poppy の話を裏付けるように思われる。しかし、どの出来事も気のせいや野生動物の仕業として片付けることも可能である。Tzvetan Todorov は、超自然的に見える出来事が本当に起きているのか、現実世界の法則で説明可能なのか、読者に判断をためらわせるのが幻想 (fantastic) 文学の本質であるとして、現実の側に寄るほど怪奇 (uncanny) に、超自然の側に寄るほど驚異 (marvelous) に近づくと論じている (Todorov and 三好 66) が、この物語はまさにその両者の間で揺れ動いている⁽⁴⁾。

人形と死者の共通項は、無生物と生物のどちらとも割り切れない曖昧さにある。死者が人形に「命」を与える時、生と死、幻想と現実、現在と過去の境界が侵犯され、主人公は今ここではない世界を垣間見ることになる。

2. 未来を改変する人形

Sweet Miss Honeywell's Revenge では、Penelope や Zibby がドールハウスで遊ぶたび、その内容が現実になる。当初、Zibby はそれを利用して望むことを起こせないかと試みる。しかし、友人の来訪を願えば、来る途中で

⁽⁴⁾ 最終的には Eleanor の存在が証明されて、物語は驚異 (marvelous) の側により近づくことになるが、Eleanor が人形に「命」を与えていることが証明されるわけではない。

事故に遭うなど、このドールハウスでの遊びは歪んだ形でしか実現しない。願いが叶うどころか、Zibby は義妹が軽い嫌がらせで行った「人形殺し」が、自分の母の身に実現するのではないかと怯えることになる。

この物語の場合は、Miss Honeywell という悪意ある霊が人形遊びをねじ曲げていることが説明されるが、このような説明抜きで、人形が未来を予見するような振る舞いを見せる物語がある。Iain Lawrence の *Lord of the Nutcracker Men* (2001) は、第一次大戦中のイギリスを舞台にした作品である。人形職人の父が出征し、母からも離れて疎開生活を送る主人公 Johnny は、戦場の父から送られてくる兵隊人形で戦争ごっこをしながら、イギリスの勝利を信じていた。父の人形は人からも “your father’s given a soul to this wooden soldier.” (Lawrence 118) とされる出来映えで、父自身の似姿を含む人形たちは、やがて醜い戦場の真実を写し出し、苦悶と死の様相を表すものになっていった。ある日、Johnny は自分の遊びと父の手紙にある戦争の成り行きが、薄気味悪いほど一致していることに気づく (‘It seemed that whatever I did with my nutcracker men would happen soon after in France.’ (Lawrence 158))。父に似た人形が、手も触れないのに色あせ、ひび割れていくことに恐怖した Johnny は、イギリスの大勝利を人形に演じさせることで、戦争の行方を左右しようとするが…。

この物語では、人形と人間の関係が、人間と神の関係になぞらえられている。戦争という極限状況の中で、兵隊人形という死を運命づけられた存在が、モデルになった人間の状態や、その身に起きる出来事までを先取りして表すことで、Johnny は運命に翻弄される人間のちっぽけさに気づかされながら、精一杯未来を変えようとする。しかし、戦争は彼の予期しない展開 (クリスマス休戦) を迎えることになる。

Martine Leavitt の *The Dollmage* (2001) は、Dollmage と呼ばれる賢女が絶対の権力をもつ架空の村を舞台とした物語である。彼女が作る人形は、そのモデルとなった人や物の運命を決定するものであり、代々の Dollmage の技により、村は侵入者から守られてきた。村で生まれた子どもは、Dollmage からその一生を予見する Promise Doll を与えられる。年老いた Dollmage は、2人の女の赤ん坊のどちらに後継者の Promise Doll を与えるか迷うが、1人の母への憎しみから他方の子を選ぶ。しかし、選ばれなかった女の子 Annakey は長じるにつれ、人形作りの天分を表してきた…。

人形を作ることで未来を紡ぎ出す能力をもつ Dollmage だが、その力を利用して運命をねじまげようとしても結局はかなわない。逆に、Annakey がそれと知らずに作り出した人形は、最後には村を守ることになる。人形を使って未来を改変しようとする試みは、多くの場合、予期しない未来をもたらすのである。

人形が主人公の現実とリンクする物語は、神または運命の存在を暗示し、人間もまたそれらに翻弄される人形に過ぎないと感じさせる。未来を改変する試みと、その予期せぬ結末は、人智を超えた何者かに対抗して、自己決定権を取り戻そうとする人間の闘いを表している。

3. 人間と入れ替わる人形

人形怪談のもうひとつの典型に、人間が人形に変身する恐怖を描いた物語がある。人形に仮の命が宿り、人間のように動くのであれば、その逆が起きてもおかしくはないことになる。しばしば、人間から人形への変身と、人形から人間への変身は同時に起こる。すなわち、人形が人間の体や立場を乗っ取り、入れ替わってしまうのである。

Helen Morgan の *The Witch Doll* (1991) は、またもや邪悪な女家庭教師が登場する物語である。Miss Dupont というこの家庭教師は魔女で、教え子 Lucy の髪の毛をかつらにして人形にかぶせることで、Lucy と人形を入れ替えてしまう。彼女の魔術に気づいた女中 Bessie らは、その技を逆手にとって Miss Dupont 自身を人形に変え、Lucy を救う。しかし数十年後、何も知らない主人公 Linda によって発見された Miss Dupont 人形はよみがえり、

新たな犠牲者を探し始める…。

Lucy が人形に取って代わられる場面は、彼女の視点から描写されている。

Then it turned its head and its face was not a doll's face but a child's — Lucy's own face, looking down at her and smiling a wicked smile. Lucy's eyes opened wide in terror — and stayed open, the lids refusing to come down again and shut out the horrible sight. (Morgan 85-86)

人間が人形に変身することで、体が自由に動かなくなるという肉体的な恐怖と、人形が人間に変身することで、自分というものを奪われる精神的な恐怖の両方がここに表れている。

William Sleator の *Among the Dolls* (1975) では、主人公 Vicky が突然ドールハウスの中に吸い込まれ、人形たちと同じサイズになってしまう。ドールハウスと外界は透明な壁で隔てられ、叫んでも外には聞こえない。学校や家庭でストレスを抱えていた Vicky は、今まで人形たちに手荒な真似をしたり、いがみ合わせたりして遊んできた。そのせいで歪んだ性格になった人形たちは、いまや 'small and helpless' (Sleator and Hyman 15) となった Vicky に同じことをしようとする。

人間が人形サイズに縮み、ドールハウスに閉じ込められて逃げ出せないという設定の作品は、他にも散見される。しかし、それらは基本的に、ドールハウスの持ち主である他の人間に支配される恐怖を描いている⁽⁵⁾。この作品では、人形が人間を支配しており、立場の逆転が描かれる。さらに、ドールハウスの中に Vicky 自身の家を模した極小のドールハウスがあり、人形たちがそれを使って Vicky の家庭不和を作り出していたことが明らかになり、そもそも人間が人形を支配するという前提が揺らぐ不安を生み出している。

Neil Gaiman の *Coraline* (2002) は、忙しい両親に放任されている少女 Coraline が、自分の家と不思議な通路でつながっているそっくりな家で、目がボタンである以外は母にうり二つの 'the other mother' に会おう物語である。実物と違い、みんなが優しく Coraline に構ってくれるこの世界では、父も隣人たちも全員ボタンの目をしており、'the other mother' は、Coraline も目をボタンに替えさえすれば、ずっとこの世界に留まると誘う。

ボタンの目は明らかに人形の比喩であり、'the other mother' は Coraline が母への不満から夢で作り出した代理母だと解釈できる。しかし、それが Coraline 自身をも人形にしようとしてくることは、人形—人間関係の逆転であるとともに、母—娘関係に本来的にひそむ支配欲を視覚化し、母によって成長をせき止められる娘の恐怖を表している。

人間と入れ替わる人形の物語は、支配関係の逆転と、自我の喪失の恐怖を描き出す。また、Vicky や Coraline の経験は、自分の生み出した物に牙を剥かれる恐怖、いわゆるフランケンシュタイン・コンプレックス⁽⁶⁾にも通じる。

II 人形ファンタジーにおける恐怖の源泉

1. 問題を抱える主人公たち

前章で概観したとおり、人形ファンタジーの恐怖にはさまざまな種類がある。しかし、児童文学の一分野としての人形ファンタジーにおいては、それらの恐怖を生み出し、強化している要因として、ひとつの共通項が見出せる。

⁽⁵⁾ Eve Bunting の *The Lambkins* (2005)、Alex Shearer の *The Speed of the Dark* (2003) などが挙げられる。

⁽⁶⁾ SF作家の Isaac Asimov が提唱した概念で、ロボットが人間に反逆するのではないかとの恐怖を指す。小野 (65-66) 参照。

それは、ほとんどの主人公たちが内面的に何らかの問題を抱えているということである。恐怖の正体が、たとえば悪意ある霊のように外在的なものであるにせよ、それは主人公の内面と呼応し、不安や不満を糧にして力を得ていく。Miss Honeywell が Zibby を選んだのは、母親の再婚を控えた彼女が ‘emotionally weak…in turmoil’ (Reiss 216) の状態にあったからだった。戦争のストレスを抱えた Jack や、両親に不満を抱いていた Coraline の場合は言うまでもない。

大人向けの人形怪談においては、主人公の内面は必ずしも焦点を当てられない。わかりやすい例として、M. R. James の短編 ‘The Haunted Dolls’ House’ (1923) と前述した *The Dollhouse Murders* を比較してみよう。2つの作品のプロットは非常に似通っている。主人公はどちらもたまたま古いドールハウスを発見し、夜中にその中で人形たちが殺人事件を演じるのを目撃する。彼らは事件を調べ、それが過去に実際に起こったことだと確信する。しかし、‘The Haunted Dolls’ House’ の成人男性の主人公 Mr. Dillet はそれに関して何もしない。彼は不運な第三者に過ぎず、ドールハウスはしまい込まれるだけで、彼の人生を変えることはない。

それに対して、*The Dollhouse Murders* では、ドールハウスとの出会いが主人公 Amy と家族の人生を大きく変えることになる。Amy の内面的問題は、知的障害がある妹 Louann との関係である。妹の世話を押しつけられる不満や、妹のせいで友人が離れていく不安を抱えていた Amy は、家出先の伯母 Clare の家で、ドールハウスの怪異に遭遇する。彼女が謎を解くことができたのは、人形が動くことを不思議と思わない Louann が一緒にいて、恐れずに人形の訴えを感じ取ったからだった。この経験を通じて、Amy は Louann を単なる ‘family burden’ (Wright 147) ではなく、生身の人間として、妹として愛していることを実感する。

また、前述の *Doll Bones* においても、物語の原動力は父に対する Zach の怒りと、その背後にある大人になることへの恐れである。Zach は人形遊びを通して、‘he was accessing some other world’ (Black 3) と感じており、それは思春期に差し掛かり、心身に起こる変化をもてあますとともに、親や世間に苦い失望を感じ始めている彼にとってかけがえのないものだった。

He wondered whether growing up was learning that most stories turned out to be lies. (Black 75)

最終的に Zach は、Eleanor の墓を見つけ出すことで、‘maybe no stories were lies’ (Black 238) と感じることができ、成長=変化が悪いことばかりではないと信じられるようになる。

このように、人形ファンタジーの恐怖は主人公の内面的問題とつながっている。そして、その恐怖を潜り抜けて結末にたどり着く時、主人公の内面にも変化が訪れる。問題の解決には至らなくとも、何らかの方向性を見出し、一歩成長する姿が描かれるのである。

2. 問題を具現化する人形たち

人形ファンタジーの恐怖と主人公の内面的問題との結びつきには、作品により濃淡があるが、その極端な形では、問題そのものが人形の姿を取って恐怖を生み出しているものがある。

Among the Dolls において、Vicky の虐待が人形たちの性格を決定し、彼女への報復をもたらすことは前にも述べた。人形たちは彼女に繰り返しこう語る。“It is you, after all, who has made us what we are.” (Sleator and Hyman 24) すなわち、人形たちは彼女自身の歪んだ心理を具現化しているとも言える。このような構図は、人形ファンタジーの最初期の作品にも見られる。

Mark Lemon の *The Enchanted Doll* (1849) は、恐怖小説ではなく寓話仕立ての創作フェアリー・テールであるが、その中にも恐るべき人形のモチーフが見て取れる。主人公の人形職人 Pout (名前が性格を表している) は、隣人への嫉妬心を Fairy Malice に見込まれ、Enchanted Doll を贈られる。この人形は何度売っても Pout の元に戻ってきて、彼の嫉妬心が膨らむほど巨大になっていく。恐ろしくなった Pout は人形を壊したり焼いたりするが、‘charred and almost shapeless’ (Lemon 72) になっても人形は繰り返し戻ってくる。彼が悔い改め、隣人と和解してはじめて、Enchanted Doll は消え失せる。明らかに、この人形は彼の嫉妬心の具現なのである。

カーネギー賞を受賞した Robert Westall の *The Scarecrows* (1981) では、主人公 Simon の母の再婚相手への憎悪が、昔の殺人事件の現場に残る憎悪と呼応し、3体のかかしの姿となって Simon の家に迫ってくる。13歳の Simon は、憎悪から来る暴力的衝動を制御できず、どこかからやってきて自分の体を乗っ取る ‘devils’ だと認識している。

I have moved them [the scarecrows], he thought. I open the door. I give them the power. Every time I let the devils in. (Westall 141)

3体のかかしは死者が取り憑く人形的一种かもしれないが、それらに力を与え、Simon の家族を攻撃させようとするのは、彼自身の内なる ‘devils’ に他ならない。それを知りながらも、Simon はかかしの接近を止めることができず、家族の身に悲劇がふりかかる予感になすすべもなく脅え続ける。

これらの物語で人形が恐怖をもたらすのは、それが主人公自身の問題を具現化しているからであり、主人公にとってもっとも目を背けたいものであるからだと言える。

3. 人形の暴走と受容

Simon は結局、友人 Tris の力を借りて、ぎりぎりの瀬戸際でかかしたちを打ち倒すことに成功する。それは、彼が ‘devils’ を自分自身のものと認め、鎮めるという大仕事をやり遂げたことを意味する。しかし、かかしたちの暴走は、彼にとって自分の問題を理解し、制御することがいかに難しかったかを示している。

Scott William Carter の *Wooden Bones* (2012) は、Carlo Collodi の *The Adventures of Pinocchio* (1883) の後日談の体裁をとった作品である。人間になった Pino (Pinocchio) は、父 Geppetto と静かに暮らしていたが、母が欲しいという思いから、Geppetto の亡妻 Antoinette に似せた人形を作る。その人形が動き出した時、Pino には木の人形に命を吹き込む力があることが判明する。しかし、Pino 自身とは違い、生み出された人形は堅い木の体のまま、口もきけずぎくしゃくと動くだけの不完全な命だった。それでも彼の力を欲する人間は後を絶たず、Pino と Geppetto はどこにも安住の地を得られず逃げ惑う。

Pino は脅しや懇願にあつて、やむを得ず何度も力を使うが、その度に彼自身の体の一部が木に戻ってってしまう。これは人間と入れ替わる人形のモチーフとも言える (もともと Pino は人形だったので複雑であるが)。そして彼の生み出した人形は、まったく彼の意のままにならない。中でも恐ろしいのは、最初に生み出してしまった Antoinette で、彼女は焼かれようが壊されようが、どこまでも Pino と Geppetto を追ってくる。

It was a black and charred thing, stumbling on footless peg legs, flapping a single arm as dark and thin as a poker... For a few long, agonizing seconds he could do nothing but watch the monster he'd created—

what he'd created out of love and affection for his papa —lumber along the boardwalk. (Carter 120)

描写は Enchanted Doll を思わせるが、より生々しい恐怖に満ちている。自分の生み出した怪物（‘the monster he'd created’）が暴走し、自分を追ってくるというのは、ゴーレムやフランケンシュタインの物語に通じる恐怖である。しかし、父への愛のために作った人形が、なぜこんな恐怖を引き起こすのだろうか？

その答えは結末に見出すことができる。最後に Pino は、全身が木になってしまう覚悟を決めて、自分と父を救うために力を使うが、意外にも木化していた部分も人間に戻る。Geppetto は、それは Pino が人と違う自分を受け入れたためだと言い、“Whether you are like other boys or not, what does it matter, so long as you accept yourself the way you are? You can be different *and* real, Pino.” (Carter 148) と諭す。母が欲しい、父に妻を取り戻してやりたいという一見無害な Pino の願いの背後には、人形という出自を否定し、普通の家庭で普通の少年として暮らしたいという気持ちがあった。それを捨て、特異な力も含めた自分自身を受け入れた時、彼は暴走する人形に体を乗っ取られる危機を脱するのである。

人形は、時に未熟な主人公の内面的問題や、制御しかねている力を象徴する。それらを自分とは無関係なものとして切り離したいとの願いが、人形という形象を取って表れるのである。自分の問題を見つめ、それを受け入れることが恐怖を克服する鍵であることを、これらの物語は示している。

Ⅲ 人形ファンタジーにおける恐怖の効用

1. 自我の確立と力の制御

人形ファンタジーにおいて描かれるさまざまな恐怖は、多く主人公の内面的問題に端を発しており、物語の中では、恐怖の克服と問題の解消、または少なくとも問題の認識が連動して起こることは、前章で述べた通りである。すなわち、人形ファンタジーにおける恐怖は、子どもあるいは思春期の主人公にとって、ひいては読者にとって何らかの効用をもつことが明らかになった。では、具体的にどのような効用があるのだろうか。

まず、人間と入れ替わる人形や、暴走する人形のモチーフは、自分というものを主人公に見つめ直させ、自我の確立につながる働きをする。Coraline は ‘the other mother’ の人形にされること、すなわち母の子宮に飲み込まれた胎児の状態であることを拒み、産道を思わせる通路を抜けて現実世界に帰ってくる⁽⁷⁾。その時、彼女は自分を、母とは別の名前をもつ主体としてきっぱりと主張できるようになっている (“It's Coraline, Mister Bobo,” said Coraline. “Not Caroline. Coraline.” (Gaiman 192))。Pino は自分の生み出した人形から逃げ回ることをやめ、あるがままの自分を受け入れて初めて、木化＝人形化を止めることができる。そして Simon は、かかしに力を与えている自分のやみくもな憎悪を見つめ直し、義父を人間として認められるようになって、ようやく ‘devils’ を抑制できるようになる。

特に Simon や Coraline のような思春期の主人公にとって、人形のもたらす恐怖は、変化していく自分自身への恐怖でもある。思春期の少年少女が恐怖を含む物語に惹かれる理由について、Reynolds はこう分析している。

… they themselves have feelings and drives that sometimes seem strange, overwhelming and threatening. As long has been recognized, the image of monsters, aliens, or other kinds of supernaturally

⁽⁷⁾ Coraline における子宮のイメージについては、Coats (88) 参照。

powerful beings who take over the body of an ordinary person … provides the perfect metaphor for this stage in a young person's development. (Reynolds, Brennan and McCarron 6)

人形との対決を通じて、彼らは自分自身の内面に潜む怪物と対峙し、それに名前をつけ、制御することができるようになるのである。

2. 異なる視座の獲得

未来を改変する人形は、個人の意図や願望を超えた存在を感じさせる。こうした人形と出会う時、主人公は自分とは異なる視座を獲得することができる。

Johnny は開戦当時、イギリスの正義と勝利を信じ、ドイツ兵に見立てた人形たちを「殺戮」して遊んでいた。しかし、父から届く手紙や、脱走兵との出会い、校長から受けるホメロスの『イリアス』講義などが、彼の戦争への認識を徐々に変えていく。そして、人形が未来を先取りしているのではと思い当たった時、彼は次のような想像をする。

And suddenly I was frightened that I *would* see God, or that He'd see me, so tiny, staring up….

… In the middle was the little model of my father, tipped back in the mud, gazing not at the clouds but at me. In his wooden eyes, if he could see, I would be as large as God, filling the sky. (Lawrence 170)

ここで彼は、神の視座と人形の視座を同時に獲得している。それによって、ドイツ兵もイギリス兵も自分と同じく、神にとってはちっぽけな、しかし生身の存在だと感じられるようになる。クリスマス休戦の知らせを聞いた時、Johnny は 'He would bless them all, I thought; they were all the same to Him.' (Lawrence 239) と思い、戦争ごっこを一切やめる決心をするのである。

人間と入れ替わる人形も、立場の逆転という意味で主人公に異なる視座を獲得させる。Vicky はドールハウスの生活を経験して初めて、自分が今まで人形たちにどれほどひどいことをしてきたか悟る。同じような構図をもつ作品に、恐怖小説ではないが Richard Hughes の *Gertrude's Child* (1966) があり、木の人形 Gertrude が人間の少女 Annie をおもちゃとして所有する。痛みも寒さも感じない Gertrude が、悪気もなく Annie に絶食させたり、裸で放置したりする様子は、読者に自分の人形たちへの仕打ちを考え直させるだろう。

3. 他者への共感と歴史理解

Gertrude は最後に Annie に、“I think it's a crazy idea, dolls *having* to belong to children or children to dolls. Why can't they just be friends?” (Hughes and Claveloux 31) と持ちかける。支配される恐怖を通して、他者の痛みを理解することは、他者への共感と友情につながるのである。

死者が取り憑く人形も、このような他者への共感を呼び覚ますことがある。Zach は、Queen と呼んでいた人形に恐怖と不気味さを感じていたが、彼女が Eleanor という少女だったことを知り、その死にまつわる悲劇を発見した時、彼女を悼み、“I'm glad you chose us to be your champions.” (Black 241) と語りかける。悪霊となった Miss Honeywell でさえ、追い払われた後に、“Maybe if she'd lived longer, she would have reformed — but who can say?” (Reiss 422) と、一瞬の同情を捧げられる。

同時に、死者の訴えを聞き、過去の事件を解き明かすことは、歴史に対する感覚を養うことにもつながる。Amy はドールハウスの謎を通じて、自分の家族の歴史をひもとく。そして、祖父母と伯母の悲しい行き違いを解きほぐすことで、現在の自分と妹、それに両親の間のしこりを解消するのである。

人形ファンタジーにおける恐怖は、主人公にさまざまな効用をもたらす。恐怖という根源的な感情を揺り動かされ、自他の境や生死の別、時間の枠をひととき超える経験をすることで、彼らはふだん気づかない自分の中の問題と向き合い、異なる視座を獲得し、他者への共感や歴史理解を深めることができるのである。

おわりに

よく言われることであるが、人形は器であり、鏡である。幼い子どもは人形を自分の分身としてとらえ、大人が自分を扱うように人形を扱う。ほとんどの場合、そこには愛情に満ちた関係が築かれ、可愛らしい（滑稽な）人形ファンタジーの源となる。しかし、主人公が内面的問題を抱えている時、人形という器に宿るものは恐ろしい姿を取ることがある。それは Freud の言う「無気味なもの (uncanny)」すなわち「抑圧の過程を通じて精神生活から疎外されてしまったもの」(Hoffmann, 種村 and Freud 135) だと解釈できる。子どもに向けてこのような恐怖が描かれることは、きわめて現代的な風潮とも言える。

Recent children's Gothic ... reflects our culture's changing attitude toward the innocence of children, as well as what seems to be a cultural shift in our willingness to unilaterally assign blame.

... the child is in some way implicated in the appearance of the evil in her world — it is not a purely external foe. (Coats, Jackson and McGillis 7-8)

本論では、ファンタジーの中でそうした恐怖に遭遇することが、子どもや思春期の主人公に、そしてその姿を通じて読者に効用をもたらすことを主張してきた。こうした恐怖の効用について、序論でも触れた Pearce はこう述べている。

The fear they induce should be pleasurable — the delight is in the dread, and the fear should be imagination-widening. Fear become awe and wonder: the Present relates itself to the Past, the Known to the Unknown — to the Unknowable. (Pearce xix)

児童文学における恐怖は、想像力を広げ、現在と過去、既知と未知そして不可知のものを結びつけるという積極的な役割をもつものでなければならない。人形ファンタジーにおける恐怖も、その確かな一端を担っている。

文献

Black, Holly. *Doll Bones*. 1st ed. New York: Margaret K. McElderry Books, 2013.

Carter, Scott William. *Wooden Bones*. 1st ed. New York: Simon & Schuster Books for Young Readers, 2012.

Coats, Karen, Anna Jackson, and Roderick McGillis. *The Gothic in Children's Literature : Haunting the Borders*. New York ; London: Routledge, 2008.

Gaiman, Neil. *Coraline*. New York: HarperCollins, 2002.

- Hoffmann, E. T. A., 種村 季弘, and Sigmund Freud. *砂男. 無気味なもの*. 河出文庫：河出書房新社, 1995.
- Hughes, Richard Arthur Warren, and Nicole Claveloux. *Gertrude's Child*. [New York]: Harlin Quist, 1974.
- James, M. R. *The Haunted Dolls' House and Other Stories*. London: Penguin, 2000.
- Lawrence, Iain. *Lord of the Nutcracker Men*. London: Collins, 2002, 2001.
- Leavitt, Martine. *The Dollmage*. Calgary: Red Deer Press, 2001.
- Lemon, Mark. *The Enchanted Doll and Tinykin's Transformations*. Classics of Children's Literature, 1621-1932: Garland Pub., 1976.
- Morgan, Helen. *The Witch Doll*. Hamilton, 1991.
- 小野, 俊太郎. *フランケンシュタイン・コンプレックス：人間は、いつ怪物になるのか*. 青草書房, 2009.
- Pearce, Philippa. *Dread and Delight : A Century of Children's Ghost Stories*. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Reiss, Kathryn. *Sweet Miss Honeywell's Revenge : A Ghost Story*. Orlando, Fla.: Harcourt, 2004.
- Reynolds, Kimberley, Geraldine Brennan, and Kevin McCarron. *Frightening Fiction*. London: Continuum, 2001.
- Sleator, William, and Trina Schart Hyman. *Among the Dolls*. 1st ed. New York: Dutton, 1975.
- Todorov, Tzvetan, and 三好 郁朗. *幻想文学論序説*. 創元ライブラリ：東京創元社, 1999.
- Waugh, Sylvia. *Mennymys Alone*. Greenwillow Books, 1996.
- Westall, Robert. *The Scarecrows*. London: Chatto & Windus, 1981.
- Wright, Betty Ren. *The Dollhouse Murders*. An Apple Paperback. Vol. Apple chillers: Scholastic, 1983.